

大切だからこそ

福岡県立久留米高等学校 二年 岡野 咲希

祖母に対して、母が怒鳴っていたのを今でも覚えています。私の母は、よく冗談を言ったり人のことを気遣ったりしてくれるような、明るくて優しい人柄です。また、祖母との楽しかった思い出を私に話してくれることもあり、祖母を大切に思っているのが常に伝わってきていました。だからこそ、私は祖母に対して怒鳴る母の姿を忘れられずにいました。

私が小学校4年生の頃、一人暮らしの祖母は物忘れが多くなりました。食べ物があることを忘れて腐らせてしまったり、出かけた際に家への帰り道が分からなくなり帰れなくなってしまうたり、日常生活に支障をきたすようになっていたのです。心配した母は、週に一度、仕事が休みの日には必ず祖母の買い物に付き添うようになりました。せっかくの休みの日なのに、母はゆっくりすることもできず、その日は一日中買い物に付き合い、夜遅くまで介護をし、時には日を跨ぐこともありました。そのころの母は今よりもずいぶん疲れたような表情をしていたのを覚えています。

いつものように祖母の買い出しに付き添った帰りのことです。車に乗っても、祖母は落ち着きがなく、「今何時ね?」「今日は何日ね?」「さきちゃんは今、小学2年生やったかな?」など、ずっと同じことを聞いてきます。そのたびに、「午後9時よ」「十日よ」「もう4年生になっとるよ」と母は答えます。しかし、祖母は耳を悪くしていたので、こちらがしっかりと答えても、「なんね?」と聞き返していました。そんなことが一日に何度も何度も繰り返されるので、初めこそ丁寧に返していた母も、だんだんと刺々しい言い方で返すようになります。挙句の果てには、怒鳴るような大声に変わっていきます。そうすると、祖母は大抵悲しそうな顔をするので、私は母に対して、「おばあちゃん、かわいそう。そこまで言わなくてもいいのに」と思っていました。

祖母の症状の悪化をきっかけに、私が小学校6年生の頃、祖母は施設に入ることになりました。母はしばらくはその手続きなどで忙しそうにしていたのですが、落ち着いてくると、以前のように疲れ切った顔をしないようになっていました。

私は当時祖母がかわいそうだということばかりに目を向けていて、母がどんな思いを抱いていたのか、全く気にかけていませんでした。それどころか、怒鳴る母を悪者のようにさえ思っていたのです。

この弁論に参加するにあたって、私は介護の当事者であった母から、当時の話を詳しく聞くことができました。介護をしていた頃の母は、小学生の私に泣き言を漏らすことはありませんでした。また、当時の私も母の気持ちを気にかけることはありませんでした。しかし、母の気持ちに寄り添いたいと思うようになった今、当時母がどんな思いを抱いていたのか、高校生になった今だからこそ話してもらえるのではないかと考えました。「介護をする中で、周りの人にしてほしかったことや言ってほしかったことはある?」と私が母に尋ねると、母は「介護することに必死だったから、浮かばないなあ。」と答えました。思い返してみると、介護をしている母は、怒鳴っているばかりではありませんでした。祖母が施設に入った後も、一人暮らしの時より穏やかに過ごしているのを見て、「健康に暮らせているみたいで良かった」とも言っていました。私はそこでやっと、母は祖母が言うことを聞いてくれず苛立って怒鳴っていたのではなくて、必死に介護をしていたからこそ、祖母のことが本当に大切だからこそ、大声を出してまで話をしようとしていたのだと気づきました。

もし私が母を介護するようになったら、母が私の話をすんなり理解できないようになったら、ずっと同じ話をされたら、私のことが分からなくなったら……それでも怒鳴らずにいられるでしょうか?

私たちも、いつかは介護をする日が来るかもしれません。その相手は両親に限らず、自らのパートナーである可能性も有り得ます。誰にとっても関係があることなのです。

みなさんの中には、店内や道端で声を張り上げながら介護をする人を見たことがある人もいると思います。大声で介護をしている人達に対して、「そんなに言わなくてもいいのに」と考えた人もいることでしょう。しかし、次のような考え方をしてみてもいいかもしれません。介護をする人達は、どうして人前で大声を出してまで介護をしているのでしょうか。その人のことが大切だからこそ、必死に向き合っているからこそ、だからこそ、大声を出してまで話をしようとしている。このように考えることもできるのではないのでしょうか?

介護をする人々の背景を想像して、慮る。私は、この考え方が、介護をする未来の私達にも希望をもたらすものになると考えます。